シンポジウム報告

イギリス帝国史からみたアフリカのスポーツ
― ローカルとグローバルをつなぐ手がかりを求めて ―

川本　真浩（高知大学）

Sports in Africa: from a perspective of British Imperial History

KAWAMOTO Masahiro
(Kochi University)

《はじめに》

これまでスポーツ史学会・会員の皆様のご研究から多くのことを学ばせていただいてきましたので、オンラインではありますが、今日こうして皆様の前でお話しさせていただけるのは、本当に光栄なことと感激しております。ただ、さきほど「イギリス帝国史・コモンウェルス史を専門とする…」とご紹介いただきましたが、他のお二人の報告者の先生方と比べてとくに守備範囲が広いわけでも深いわけでもありませんし、アフリカ史の専門家でもありません。しかも、多くの業績を世に問うておられる高嶋先生、藤川先生とちがって、「高知大学の川本って誰？」と思われる方がほとんどだと思います。そこで、自己紹介を兼ねて、私の研究関心がスポーツ史に至るまでの流れをお話しします。

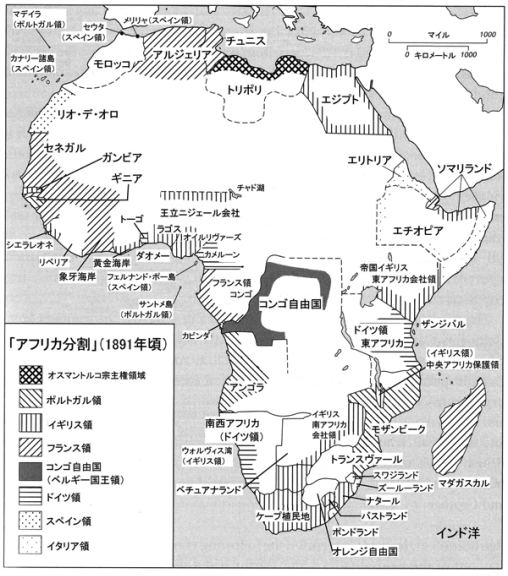
ずいぶん昔になりますが、大学院生の頃は、イギリスで開催された国際博覧会について調べていました。世界最初のロンドン万博（1851年）のあとも19世紀後半から20世紀初めにかけてイギリスでは博覧会がいくつも開かれますが、世界の博覧会の歴史のなかではさほど注目されません。そのようなイギリスでの博覧会について、帝国の表象ないし帝国プロパガンダの観点から考えていました。その際に博覧会でおこなわれたサブ・イベントに目が留まり、そうしたイベントそのものに関心が広がります。そのひとつが野外歴史劇と訳すことができる「パジェント」という住民参加型イベント、そしてスポーツ大会でした。ご存じのように、1900年と1904年のオリンピックはそれぞれパリとセントルイスで開催された万国博の催事のひとつとしておこなわれ、1908年のロンドン五輪も仏英博覧会の会場ホワイト・シティにつくられた競技場で開催されました。スポーツ大会への関心は、元来あった帝国意識や帝国プロパガンダとも結びつき、より直截な形での帝国スポーツイベントすなわち1930年に始まるエンパイア・ゲームズ、現在のコモンウェルス・ゲームズをイギリス帝国史のなかに位置づけようとする試みに繋がります。現在は、エンパイア・ゲームズ／コモンウェルス・ゲームズに関する勉強をつづけながら、その第１回大会から正式競技のひとつであるローンボウルズという、イギリス発祥の数百年の歴史をもつスポーツについても研究を進めています。

アフリカのスポーツに対する私の関心は上に述べたようなイギリス帝国におけるスポーツに関する研究から発しています。よって、これからお話しすることも、拙いながらとりくんできた「イギリス帝国=コモンウェルス」の歴史からみた「アフリカのスポーツ史」になります。ただ、『ス

ポーツの世界史』第14章を書いてから少し時間が経ち、最新の研究動向をじゅうぶん追えていません。ひょっとすると、高嶋先生が翻訳された『スポーツがつくったアジア』のアフリカ版のような研究成果がすでに出ているかもしれません。その点はお許しいただくとして、ここでは、イギリスが影響を及ぼしたアフリカにおけるスポーツの歴史の一端を示しながら、アフリカのスポーツ史およびスポーツのアフリカ史について皆様に議論していただく手がかりを示し、参加者の皆様から疑問、論点、知見、様々なご指摘ご教示をいただきたいと思っています。なお、本報告でいうアフリカはいわゆる「サハラ以南」を指します。

《西洋スポーツが伝えられた頃のアフリカ》

まず、スポーツの世界史のなかのアフリカをながめる前提として、「世界史のなかのアフリカ」イメージの微調整をしておきたいと思います。



（A. Porter (ed.), *The Oxford History of the British Empire vol.III: The Nineteenth Century*, Oxford/New York, 1999, p.647, Map 27.2 より著者作成）

《出典：坂上康博、中房敏朗、石井昌幸、高嶋航［編著］『スポーツの世界史』一色出版、2018年、376頁》

『スポーツの世界史』第14章の冒頭にこのような19世紀末アフリカの地図を載せました。高校教科書でなじみのある「アフリカ分割」の地図とは見た目がずいぶん異なります。「アフリカ分割」というのは列強諸国が身勝手に境界線を引いて各国の「取り分」を決めたものであるのに、こんな地図ではその意味するところが伝わらない、とお叱りをうけるかもしれません。ただし、引用元は『オクスフォード版イギリス帝国史』第３巻（*Oxford History of the British Empire*, vol.3（1999））ですから、けっして地図に不備があるわけではありません（ただし日本語表記の不備は私の責任です）。あえて、このような地図を示すことで強調したかったのは、19世紀終わりごろのアフリカが、列強諸国によって「分割」されたとたんに、その境界線に囲まれた地域とそこに住む人びとがひとつの「まとまり」になったわけではない、という点です。列強諸国が自分の取り分とした植民地は、そのあと数十年間にわたって仕掛けられた支配の仕組みによって、次第に「国民国家」の外形をとるように仕向けられていきました。アフリカにおける西洋伝来のスポーツは、そうした歴史のなかで組み立てられていった帝国主義的植民地支配の仕組み、のちの「国民国家」の枠組みのなかにあったことをおさえておきたいと思います。

また、この章の副題「「スポーツとは何か」を世界に問いかける大地」というフレーズにもメッセージをこめました。それは、アフリカでのスポーツの歴史と現在を探ることの意義として、ひとつに欧米あるいは日本よりもアフリカに近代スポーツの「光と影」がいっそう露わに見いだせるだろうということ、ふたつめにスポーツに限らず「アフリカの○○」という一語では表現しきれないほどの多様性がアフリカのなかにあるということです。とくに後者について歴史的に言えば、植民地化以前からの現地社会の多様な特質、旧宗主国ごとの植民地支配の相違とムラ、そして植民地支配が独立後の社会にも深く影を落としていることなど、さまざまな要因と変化を視野に入れる必要があります。それらを考え合わせながらスポー

ツにアプローチするのはたいへん難しく思えるかもしれませんが、なおのことアフリカのスポーツを探り、考えることの意義は大きいとも言えます。

こんなに大言壮語しておきながら、私が提示しようとする「アフリカのスポーツ」の姿には偏りがあることを予めお断りしておかなければなりません。イギリス人が残した史料や二次文献に頼るかぎり、そこから把握できることがらは支配者側の視点に偏りがちです。さらに、アフリカにおける身体文化の伝統やそのルーツに言及しようとするときには、「植民地化以前」を静態的にとらえてしまうことのないよう、細心の注意を払うべきでしょう。

前置きが長くなりましたが、以下、19世紀末以降の植民地期ケニアにおけるスポーツから説き起こして、20世紀後半の反アパルトヘイト国際キャンペーンの一環としてのスポーツボイコットまで、アフリカのスポーツと植民地支配、帝国主義との関係を概観します。

《植民地支配下のアフリカとスポーツ》

まず、イギリス領東アフリカ（のち王領植民地ケニア、現在のケニア）に着目し、陸上競技を中心に植民地支配下での西洋スポーツの導入、変容、「組織化」から国際競技の舞台への流れをたどってみましょう。

「アフリカ分割」に相前後する19世紀の終わりごろ、「サハラ以南」に西洋スポーツが急速に導入されます。そこでは教会、学校、軍隊、警察などが主なエージェントとなります。その理念的・思想的背景には、高嶋先生がご報告されるアジア同様、「文明化の使命」がありました。むろん、そうした「高邁な理念」と重ね合わせられる形で、支配ないし社会統制の一手段としてスポーツが活用された面も無視できません。

ただし、ここで注意しなければならないのは、たとえばイギリスに存在したスポーツがアフリカの植民地社会にそっくりそのまま「移植」されたわけではないし、以前から各地に存在した身体運動ないし身体文化が植民地支配の進展と西洋スポーツの導入によって一掃されてしまったわけではない、ということです。

19世紀末から20世紀初頭の英領東アフリカにおいても、在来の身体文化と西洋伝来のスポーツは混在していました。たとえば、陸上競技のやり投げが植民地期ケニアでおこなわれていたことは、伝道団体が主催するスポーツイベントや学校での活動に関する史料に確認できます。ただし、それら史料からは、投擲距離を競うやり投げJavelin Throwだけでなく、射的の正確さを競う在来の槍投げspear throwingも並存し、楽しまれていたのが読み取れます。

そのような植民地期ケニアにおけるスポーツ・イベントの描写にはもうひとつの特徴も見てとれます。それは、「競技」「真剣な勝負」「身体訓練とその成果を披露する」といったスポーツやスポーツ・イベントのありようのなかに「楽しみ」や「笑い」の要素が綯い交ぜになっていたことです。それは「優れた競技パフォーマンスよりも失敗したときのほうが観戦者の歓声が大きかった」という主旨の記述に確認できます。もっとも、そうした記述が、それを書き残した白人の現地アフリカ人に対する「まなざし」が含まれた見方であることには留意しなければなりません。他方で、1902年に結成された現地人ライフル部隊によるクロスカントリー競走で「優勝者は試合後に他の者と戦わねばならなかった」とするイギリス人士官の記述からは、西洋スポーツの実践に現地の慣習が持ち込まれていたこともうかがえます。

そして、植民地支配下のアフリカにおいて、意外と見過ごされがちな西洋スポーツの特徴として、スポーツ熱心だったイギリス人がもっぱらアフリカ人にスポーツを教え込むケースが目につくいっぽうで、当人たちは―少なくとも植民地滞在中は―競技志向でスポーツにとりくむことはあまりなかったように見受けられることがあります。定住植民地がつくられた南アフリカや植民地支配末期など一部の例外を除いて、白人たちはもっぱら仲間うちの社交の場で「気晴らし」としてのス

ポーツに興じたように思われます。ここではあくまで推論として示すにとどめますが、たとえばアジアなど他地域の事例も参照しながら探る余地があるでしょう。

そうした植民地において、とくに大戦間期の1920～30年代には、競技スポーツの導入にいっそう力が注がれます。それはさまざまな競技で国際統括団体がつくられると同時に、国際的に統一された競技規則の制定やそれに則った国際競技会の開催が増えていったこととも並行しています。王領植民地ケニアとなった地にも白人支配層の主導―着任まもない植民地行政官のよびかけに学校や伝道団体など既存の組織を主宰する白人が協力する形―で域内での競技を統括する団体がつくられました。そのようにして1924年に設立されたアラブ・アフリカ・スポーツ協会（AASA）が主催して翌25年に始まった陸上競技会は、1930年代にはケニア各地域の代表選手が出場する大会となりました。さらに、この大会で優れた成績をおさめたアスリートが他の植民地代表との対抗戦に派遣されます。AASAに登録するアスリートそして「ケニア代表」は全て非白人であったことに注目すべきでしょう。AASAを主導するのは白人であり、競技会に出場するのは現地アフリカ人であったという事実からは、植民地支配ないし「文明化」の手段としてのスポーツのありようが明らかです。他方で、内外競技会の階層化、域内代表選抜システムの構築、「ケニア記録Kenyan national record」の創出により、後代の国家建設にもつながるような仕組みやレトリックがつくりだされました。第２次世界大戦後にケニア陸上競技協会（KAAA）の設立を主導したのもやはり白人植民地官僚でした。ただ、KAAAが主催した1951年の第１回ケニア選手権は、アフリカ人だけでなく白人、インド系、アラブ系などの競技者も出場してケニア・チャンピオンを決める大会として開催されました。域内の競技者が「人種」や民族の区別なく出場できることは、表面上、カラーバーを取り払ったかのように見えます。しかし、1930～50年代にかけての植民地行政のありかたと合わせて考えれば、統治上の便宜による「地域ないし民族」区分の定着とそれぞれの重層的な帰属意識―たとえば「マサイ人でありかつケニア代表選手である」など―の醸成をスポーツの普及・奨励が後押しするという構図がみてとれます。

このように植民地支配にしっかり組み込まれたスポーツでしたが、20世紀半ば頃の独立運動が展開する際には、それが独立運動に活かされる事例もみいだせます。植民地期に欧米に留学した現地人エリート層の子弟が、留学中に得た知識、技能、人脈などを活用することで、のちの独立運動で主導的な役割を果たす例は、一般にもよく知られています。いっぽう、留学経験がなくても、たとえば植民地につくられたスポーツクラブを通して西洋流の組織運営に触れ、その知見を独立運動のための組織づくりに活用することもできました。もっと直接的に独立運動に関与した事例もあります。ケニアに隣接するイギリスの委任統治領タンガニーカでは、1950年代半ばに、独立運動を主導していたタンガニーカ・アフリカ民族同盟のメンバーが当局の監視を逃れて集会を開く場所をダルエスサラーム・アフリカ青年スポーツクラブが提供しました。

《反アパルトヘイト・国際キャンペーンにみるアフリカとスポーツ》

このようにして宗主国からの独立を果たしたアフリカ諸国におけるスポーツは、じつのところ、政治的独立を達成した後も植民地期の延長線上に規定される面がありました。それは、ガーナ独立運動の指導者K・ンクルマがサッカーチームを強化して国際試合で活躍させることによって「国民」の一体感を高め多くの民族に分かれる国家を統一しようとしたことにもうかがえます。経済的な意味での植民地主義がアフリカの新興独立国に残ったことは周知のとおりですが、「スポーツと帝国（主義）」の結びつきも「スポーツと国民国家」の結びつきに継承されたと言えるでしょう。

さらに、20世紀後半になると、国際社会におい

て存在感を高め、国家ないし運動勢力の主張を展開する契機としてスポーツ（の舞台）を活用するケースもでてきました。とくに、1960年代から80年代にかけて、南アフリカの人種隔離政策を非難し、その廃止を求める国際キャンペーンとしての反アパルトヘイト運動は、ブラックアフリカの新興独立国が重要な役割を果たしつつ、そこに世界各地の団体や個人が加わることで大きなうねりとなりました。そのうねりがスポーツ界にも押し寄せたことはご存じのとおりです。

反アパルトヘイト運動のスポーツ界への波及については、オリンピックでの出来事―1964年の東京五輪に南アフリカが出場を認められず、のちにIOCから除名されたことや1976年のモントリオール五輪でアフリカ諸国を中心に大規模なボイコットがおこなわれたこと―がよく知られています。ただ、オリンピック以上に反アパルトヘイト国際キャンペーンの影響を受けた世界規模の総合スポーツ大会はコモンウェルス・ゲームズです。1930年にエンパイア・ゲームズとして始まったこの大会は、イギリスの４つのネーション、イギリスから独立してコモンウェルスに加盟した国、さらにはイギリスの支配下にある海外諸領が参加して、オリンピック開催の中間年にあたる４年ごとに開催されます。南アフリカは1961年にコモンウェルスを脱退しましたが、上記の五輪と同様の理由により、1970年のエディンバラ（イギリス・スコットランド）大会でもアフリカ諸国によるボイコットの危機がありました。また、モントリオール五輪のボイコットがその２年後に開催予定であったエドモントン（カナダ）でのコモンウェルス・ゲームズで繰り返されることを恐れたカナダ政府は、五輪閉幕後すぐにイギリス政府やアフリカのコモンウェルス加盟国の政府ならびにスポーツ団体などと折衝を開始します。そして、1977年のコモンウェルス首脳会議（CHOGM）において、各国政府が「南アフリカの代表チームとの対抗戦や同チームないし同国選手との対戦を支援、奨励しない」ことと、南アフリカとの「スポーツでの接触が行なわれないようあらゆる実効的な手続きをとる」ことが「グレニーグルス合意」とよばれる文書の形になりました。こうして1976年のエドモントン大会におけるボイコット危機は回避されましたが、1979年のCHOGMにおいて「グレニーグルス合意」を再確認する「ルサカ宣言」が採択されたにもかかわらず、反アパルトヘイトをめぐるコモンウェルス・スポーツ界の混乱は続きます。1986年には、イギリス首相M・サッチャーが南アフリカに対する国際的な経済制裁を頑なに拒んだことから、エディンバラでのコモンウェルス・ゲームズがアフリカ諸国による大規模なボイコットに見舞われました。

反アパルトヘイト国際キャンペーンのスポーツ界への波及とそれによって生じた激動の歴史をふりかえると、人種差別反対という人権理念と「スポーツと政治は切り離すべき」とするスポーツ理念―両方とも「文明化の使命」を担った西洋を発祥地とする理念であることに注意すべきでしょう―が真っ向から衝突することによって、事態が袋小路に追い込まれていったさまがうかがえます。

他方で、イギリスやニュージーランドによる「南アフリカとのスポーツ交流の続行」―両国政府に言わせれば「スポーツに対する政治不介入」―をアフリカ諸国が強く非難し、激しい対立が巻き起こっても、そのアフリカ諸国はコモンウェルス・ゲームズ連盟ないしコモンウェルスから脱退しようとする動きをほとんどみせませんでした。だからこそ、イギリスやニュージーランドにはアフリカ諸国からの厳しい批判をかわす余裕のようなものがあったと言えるかもしれません。

じつのところ、アフリカ、アジア、カリブ海域の新興独立国が、イギリス本国及び旧白人定住植民地（旧自治領）と対峙し、国家のプレゼンスを顕示できる場としてコモンウェルスを重視していたと考えられます。さすれば、こうした旧宗主国と旧植民地の特異な関係を内包するコモンウェルスないしコモンウェルス・ゲームズを「帝国の遺産」と安易に解釈することはできないでしょう。そこには、植民地期から続くスポーツと政治にかかる各国の思惑が透けて見えるのです。

21世紀の現在に至るまで、オリンピックとはひとあじ違ったグローバルな総合スポーツ大会の「妙味」がコモンウェルス・ゲームズにはあります。先に述べたとおり、アフリカ、アジア、カリブ海域の旧植民地諸国のみならず現存する海外諸領もそれぞれ選手団を派遣する大会であり、参加国・地域における注目度は他の国際スポーツイベントにけっして劣りません。また、オリンピックやパラリンピックにおいても「コモンウェルス・アスリートの活躍」という報道フレーズが見られるように、スポーツ界におけるコモンウェルスの存在感は軽視できません。日本で研究上の関心が高まる気配はありませんが、帝国史あるいはグローバル・ヒストリーの観点から研究対象として注目する価値はあると私は考えています。

《スポーツ史とアフリカ：今後の展望》

ここまで、アフリカのスポーツ、あるいはスポーツから見たアフリカの近現代史の一局面をながめてきました。最後に、『スポーツの世界史』第14章執筆後の反省を兼ねて、今後の展開が期待されるテーマ２つをあげておきます。

私が担当した章の最大の「欠陥」はジェンダーの問題に全く触れなかったことです。私の力不足のためですが、言い訳をいたしますと、アフリカのスポーツ史のなかでの女性をとりあげるには、アフリカの社会のなかでの女性をふまえなければ、地に足のついた考察や議論はできないでしょう。アフリカ各地の多様な社会を考えると、このテーマに取り組むにはたいへんなパワーが必要でしょうから、パワーのある若い方にぜひ挑戦してほしいと思います。

ふたつめに、スポーツを契機とした「人の移動」について探ることが大切だと考えます。いわゆるスポーツ移民については、石井昌幸先生が翻訳された『スポーツ人類学』でも随所に現れます。そこにはアフリカ・スポーツ史が大きく展開する可能性があり、ローカルとグローバルのつながりを見いだすことができる手がかりにもなると考えます。

じつは『スポーツの世界史』第14章を書かせていただいて以来、アフリカのスポーツ史から離れてしまっていましたが、今回の報告をきっかけにふたたび勉強し直してみようかと考えています。同章のしめくくりに記した拙文をここに再掲することをお許しください。

「アフリカ大陸のスポーツ史を論じるための題材と切り口はふんだんにあるということである。今後もさまざまな研究が積み重ねられることによって、スポーツの歴史のなかにも「豊かなアフリカ」が見いだされ、スポーツそして歴史に対する理解が深まることを願ってやまない。」

ご清聴ありがとうございました。

《追記》

本発表の内容に関する参考文献として、47頁＜シンポジスト紹介＞に列挙していただいた拙稿に加えて、以下のものを示しておきます。

川本真浩「「グレニーグルズ合意」(一九七七年)にいたる道（一）―コモンウェルス事務局の動きを中心に―」『海南史学』第50号（2012年)。
同「「グレニーグルズ合意」(1977年）にいたる道（一・補論）―コモンウェルス事務局による草案について―」『高知大学学術研究報告』第61巻（2012年)。